

特集

特集では、移住を実現した方や地域活性化に力を注ぐ人々の姿、移住を検討している方のために役立つアイデアなどを毎月レポートします。



小淵沢で建築事務所「ガーデンハウス」を営む、移住者でJOINプログラマーでもある宮川淳さん・亜希子さんご夫妻。

移住者がつくる、移住者の住まい

移住という選択

そして、これからの夢

「小淵沢に移り住んで、本当に良かった。今ね、とっても幸せなんですよ」。甲斐駒ヶ岳を仰ぎ見ながら、にっこりと微笑む宮川淳さん。横浜出身の宮川さんが小淵沢に移り住んだのは、2003年のことでした。きっかけは、今は亡き前の奥様の療養のため。小淵沢の清涼な環境を求めての移住でした。「それが移住してすぐに、病気で先立たれてしまったんですね。5年ほどは、本当に落ち込みましたね。大家さんをはじめ小淵沢のみんなに支えがなければ、立ち直れなかったかもしれないです。その後、宮川さんは現在の奥様・亜希子さんとふとしたきっかけから出会い、2008年に結婚。現在は淳さんと亜希子さん、息子さんの三人で小淵沢暮らしを楽しんでいます。「この人と出会って、本当にいろいろなことが変化しました。周囲の環境、子供の学校、地元の方とのお付き合いなど……。小淵沢に移住して本当に良かった。私もそう思っています」と亜希子さん。そんなおふたりには今、夢があるそう。「なんだか慌ただしく結婚してしまっただけから、実はまだ結婚式を挙げていないんです。だから、いずれこの地に小さな音楽ホールを建てて、ふたりの結婚式を挙げたいんです」



首都圏からのアクセスも良く、別荘地や移住先として人気の山梨県北杜市。南アルプスやハケ岳にかこまれた清涼な環境が魅力です。



白州地区。静かな森林にかこまれたシンプルな平屋建ては、絵本の世界から飛び出してきたような素敵な佇まいでした。

“アーキテクトビルダー”が作る
低コストで質の高い住まい

宮川淳さん・亜希子さんご夫妻は、現在小淵沢で建築事務所「ガーデンハウス」を営んでいます。「ガーデンハウス」の住まいの特徴は、一級建築士の資格を持つ淳さんが設計だけでなく、自ら施工も手がけていること。おふたりはこのスタイルを「アーキテクトビルダー（設計＋施工を意味する造語）」と呼びます。「横浜に居た頃は、効率性を重視して分業でこなす体制でしたが、小淵沢に移住してからは、一棟一棟自分の手で丁寧に作ってゆきたいという思いが強くなりました。普通よりも少し多めに時間はかかりますが、ゆっくりと住まい手のお話を伺ったうえで、理想の生活に沿った質の良い住まいを、低コストで作ることができますから」。単に住まいを作るのではなく、楽しく暮らしていける空間を実現したい。そんな気持ちから、おふたりは移住生活全般の相談を受け、土地探しを手伝い、ご近所の方との橋渡し役も積極的に行っています。自らも移住者だからこそできる家づくり。今、「ガーデンハウス」のファンは、小淵沢周辺で着実に裾野を広げています。

特集一覧



【第6回】WEB制作から農業体験へ 大自然に包まれた暮らしの魅力を学ぶ2日間



【第5回】水の舞・長野県松本市 歴史・風土・人に出会う旅



【第4回】故郷へUターン！農業への挑戦と田舎暮らしライフスタイル



【第3回】新潟湖の新たな挑戦！The shouji 古民家で古き良き大正・昭和を再現



【第2回】編集部みんなで移住！東京から南魚沼へ 雑誌『自遊人』連載の発想 -- 後編 --



【第1回】編集部みんなで移住！東京から南魚沼へ 雑誌『自遊人』連載の発想 -- 前編 --



JOINセミナー 田舎暮らしの美談者から話を聞ける・学べる無料セミナーのご案内



メールマガジン登録

移住に関する最新情報をお届けします。

特集

特集では、移住を實現した方や地域活性化に力を注ぐ人々の顔、移住を検討している方のために役立つデータなどを毎月レポートします。



この春に移住して宮川さんが作ったコンパクトハウスに住んでいらっしゃる移住者の平澤さん。(写真一番左)

宮川さんご夫婦がつくる移住者のための住まいとは

移住者にとって大切な住宅コストについての想い

コンパクトでシンプルな造りながら、木材や漆喰壁の質感が心地よい「ガーデンハウス」の住まい。あえて注文住宅にせず、いくつかのプランから選ぶスタイルで展開しているのは、家づくりのコストをしっかりと抑えるため。「移住する人にとって、お金はとて大切な問題。だから高くても、土地と建物あわせて1000万円台で手に入れられるようにしたかったんです」と淳さん。だからこそ、最も高い20坪プラン「Type2000」でも建築費は1290万円～。内装などに住まい手が自ら手を入れる「ハーフビルド」なら650万円～に設定しています。また、実はこの住まいの一番のファンが、奥様の亜希子さんなのだそう。「この人の仕事を見ていると、ほんとうに心を込めてやっているのがわかるんです。住む人の顔を思い浮かべながら、ひとつひとつ手づくりする。これがきっと本来の家づくりなんですよ」。亜希子さんが発信するブログ「garden house ～日々雑器～」では、日々の建築現場の情報も掲載。その温かみのある記事を読み「ガーデンハウス」のファンになる人もいるのだとか。「私にとっては、幸運の女神ですね」と淳さんは微笑みます。



天井が高く、開放感のある「ガーデンハウス」の住まい。20坪、16坪、12坪など、広さによってさまざまなタイプが用意されています。



この春に北社市に移り住んだばかりの平澤さん。森にかこまれた環境と、無垢材の手ざわりが心地よい住まいに、大満足だと言います。

住まい手と作り手が築く心地よい信頼関係

「まるで木に包まれているみたいで、本当に居心地が良い家ですね。先日ハワイに行っていた時も『はやく家に戻りたいな』と思ったんです(笑)。宮川さんにおまかせて本当に良かったですね」とは、現在「ガーデンハウス」の家に暮らす平澤多津子さん。そんな平澤さんの住まいを訪れた宮川さん夫妻は、挨拶もそこそこに世間話を始めています。「ここのご主人が作る料理やカクテルが本当に美味しいんだよね」と淳さんが微笑めば、「あら、私は家庭的な多津子さんの料理が好きよ」と亜希子さんが返します。単なる依頼主と建築業者という関係ではなく、移住者同士ならではの家族ぐるみのつきあいが生まれています。それは、見知らぬ土地に移り住む人にとって、なによりも心強い関係なのかもしれません。住宅づくりの過程で、住まい手と作り手がゆっくと向き合っていく。そんな過程も、「ガーデンハウス」の魅力なのかもしれません。

特集一覧



【第6回】WEB制作から農業体験へ 大自然に包まれた暮らしの魅力を知る2日間



【第5回】水の舞・長野県松本市 歴史・風土・人に出会う旅



【第4回】故郷へリターン！農業への挑戦と田舎暮らしライフスタイル



【第3回】新潟湖の新たな挑戦! The shouji 古民家で古き良き大正・昭和を再現



【第2回】編集部みんなが移住! 東京から南魚沼へ 雑誌『白濁人』連載の発祥 -- 後編 --



【第1回】編集部みんなが移住! 東京から南魚沼へ 雑誌『白濁人』連載の発祥 -- 前編 --



JOINセミナー 田舎暮らしの実践者から話を聞く・学ぶ無料セミナーのご案内



メールマガジン登録

移住に関する最新情報をお届けします。



現在、建築中の現場にて働く大工さんたちと宮川さんご夫妻。自然素材を使った家は、少人数でコツコツと削りあげていく。

宮川さんの住まいづくりを支える仲間たち

仲間たちと作り上げる 心地よい住まい

設計も施工もこなす“アーキテクトビルダー”として、住まいづくりに携わる宮川淳さん。亜希子さんのJOINブログの効果もあって、たくさんの依頼が舞い込む現状を淳さんは「ちょっと仕事が多すぎるくらい(笑)」と言います。そんな時に住まいづくりをサポートするのが、信頼のおける地元の職人さんたちです。この日訪れた大泉高原の現場では、熟練の大工さんたちが、黙々と作業中でした。『ガーデンハウス』の現場はメンバーが楽しい、仕事していて気持ちがいいよねとは、大工のひとり宮田さん。実は宮田さんをはじめとするみなさんは、いずれも移住やUターンの経験者。だからこそ、移住のための住まいづくりに、つい熱が入ってしまうのかもしれない。「僕の思いを汲んでくれるのはありがたいけど、正直『ちょっと丁寧過ぎる。もっと早く!』と思う時もありますよね(笑)」と淳さん。大工さんのほかに、水道工事や木の伐採など、地元の仲間なくしては低コストで高品質の『ガーデンハウス』の住まいづくりはできないのだとか。工業製品のように量産するのではなく、一軒一軒時間をかけて手づくりで作り上げて行く家。初夏の太陽が降り注ぎ、高原の風が吹き抜ける心地よい建築現場が、そこにありました。



東京から小淵沢のお隣の長野県原村に移り住んだ宮田さん。住まいづくりのことはもちろん、地域との交流の大切さなどを知り抜くプロフェッショナルです。

特集一覧



【第6回】WEB制作から農業体験へ 大自然に包まれた暮らしの魅力を知る2日間



【第5回】水の舞・長野県松本市 歴史・風土・人に出会う旅



【第4回】故郷へUターン！農業への挑戦と田舎暮らしライフスタイル



【第3回】碓氷湖の新たな挑戦「The shouji」古民家を古き良き大正・昭和を再現



【第2回】編集部みんなで移住！東京から南魚沼へ 雑誌『白濁人』連載の発想 -- 後編 --



【第1回】編集部みんなで移住！東京から南魚沼へ 雑誌『白濁人』連載の発想 -- 前編 --



JOINセミナー 田舎暮らしの実践者から話を聞くと、学ぶ無理なセミナーのご案内



メールマガジン登録

移住者支援の場へ参加する



無垢材のフローリングや漆喰壁など、素材の持ち味を生かした住まいを得意とする『ガーデンハウス』。素材事にあえて粗いまま仕上げするなど、質感へのこだわりはさすがです。

ガーデンハウスを支える 亜希子さんの存在

『ガーデンハウス』で設計・施工を手がけるのが“アーキテクトビルダー”宮川淳さんなら、裏方として活躍するのが奥様の亜希子さんです。たとえば、多くのファンをもつJOINブログ「garden house ~日々雑器~」は亜希子さんが担当。「実は小淵沢に移り住むまではブログはおろかメールさえおぼつかなかったのですが、『ガーデンハウス』の住まいづくりや、移住生活のことを知って頂きたくて、一生懸命勉強しました(笑)」と亜希子さん。また、実は亜希子さんは宅地建物取引主任者の資格を持つ不動産のプロ。専門家ならではの知識と移住経験者の視点で、小淵沢周辺の土地についての相談にも乗ることも。時には仕事のことやローンの相談なども行っていると言います。「でもそれは業務としてではなく、あくまでも移住を受け入れる側としてやっています。仕事にしようとする、やはり中立的な判断がしにくくなりますから」。住まいを建てるだけでなく、そのあとの移住生活も十分に楽しんで欲しい。そんな想いは、亜希子さんにも共通しているようです。



移住を望む人々を、受け入れる側として

頼れる人がひとりいるだけで 移住生活はずっと楽になる

たとえひとりでも「頼りになる知り合い」がいると、移住生活はとて楽になる。みずからの移住体験から、そう考える宮川さんご夫妻は、「ガーデンハウス」の依頼主と地元の人々の橋渡しも、積極的に行っています。たとえば白州の横手地区で林業などを手がける三澤幸貴さんも、「頼りになる」友人のひとりです。三澤さんは10代続く地元名家の出身で、自身も東京からのUターン経験者。防災や防犯の観点から地域の自主防災会を結成するなど、積極的に移住者と地元の人々をつなぐ活動をしています。「畑を借りたい、地元のことが知りたい、薪がほしい……」など、困ったことがあったら三澤さんのところに飛んできて、相談すればいい(笑)。こちらでは、子供時代のように、事前に約束をしなくても訪ねあえる友人関係があるんです。優しくてのどかな田舎の人間関係を、移住してくる人にも楽しんでほしいですね」と宮川さんは言います。



白州の横手地区で林業や原木しいたけの栽培などを営む三澤さんは、地元のキーパーソン。地元での信望も厚く、さまざまな人が三澤さんのもとを訪れます。



「甲斐適生活相談会」で知り合ったという「創甲斐建築設計社」主宰で一級建築士の藤原肇さん。自ら建築設計を行う傍ら、建築申請などの事務手続きで「ガーデンハウス」の住まいづくりに協力することもあるそう。

「甲斐適生活応援隊」として 移住支援情報を発信

宮川さんご夫妻は、JOINブログのほかにも、移住に関する情報発信を積極的に行っています。たとえば、山梨への移住や二拠点生活を支援する「甲斐適生活応援隊」の一員として行う相談会への出展や講演などもそのひとつ。さらに宮川さんはこの「甲斐適生活応援隊」の活動で知り合った山梨県の「創甲斐建築設計社」の藤原肇さん(左写真)らと連携を取りながら、よりスムーズな移住者支援の可能性を探っているとも言います。移住者のために住まいを建て、土地や地域とのつながりをつくり、さらに移住希望者に情報発信をする。その理由を宮川さんに尋ねると、こんな答えが返ってきました。「たくさんいる男性の中から自分を選んでくれた奥さんを大切にしたいのと同様に、たくさんの方の中から自分たちを選んでくれた依頼主のことも大切にしたい。なによりも、私たち自身が山梨に移住して本当に良かったと思っています。だから、これから移住を目指す人にも、できるだけのことをしたいと思うんです」。

特集一覧



【第6回】WEB制作から農業体験へ 大自然に囲まれた暮らしの魅力学ぶ2日間



【第5回】水の舞・長野県松本市 歴史・風土・人に出会う旅



【第4回】故郷へUターン！農業への挑戦と田舎暮らしライフスタイル



【第3回】新潟湖の新たな挑戦「The shouji」古民家で古き良き大正・昭和を再現



【第2回】編集部みんなで移住！東京から南魚沼へ 雑誌『自選』連載の発想 -- 後編 --



【第1回】編集部みんなで移住！東京から南魚沼へ 雑誌『自選』連載の発想 -- 前編 --



JOINセミナー 田舎暮らしの実際者から話を聞く・学ぶ無料セミナーのご案内



メールマガジン登録

移住に関する最新の情報をメールでお知らせします。